

論文審査結果の要旨

氏名 佐藤 昇

本論文は、主に前4世紀アテナイの法廷弁論に現れる賄賂言説を分析して、賄賂を贈るに値する「権力者」とは誰か、そして彼らを権力者たらしめる政治構造、政治文化とは何であったのかを考察した論文である。どのような種類の賄賂が非難の対象となったか、また賄賂が非難された背景にある社会的価値観とは何かが、豊富な一次史料の分析と事例研究を通して明らかにされる。

第1章では、一般公職者に対する収賄言説が弁論史料などに少なく、また収賄非難の論調が弱いのは、アテナイ行政機構への市民参加が広範な社会層に及んでいた結果であると論じられる。第2章では、前4世紀の法廷弁論中、外交に関わる政治家の収賄言説が頻出するのは、アテナイ民主政が伝統的な私的紐帯に基づく対外交渉文化の中に成立していたこと、さらにアテナイの政治家層が前5世紀末より変質し、新興の中・下層市民がそこに参入するようになったことの現れであるとする。第3章では、アテナイの政治家たちがパトロネジ関係を基本とする社会的紐帯を利用して活動しており、こうした非対称的な私的関係の存在が、政治家に対する賄賂非難の原因の一端をなしたとの考察が展開される。著者は、贈収賄に対する非難の言説が頻出する背景に、政治家たちが国内外に有する私的紐帯を利用して互いに接触交渉する政治文化と、誠実な意見陳述を要求する民主政のシステムとが共存している構造、および前4世紀のアテナイの政治に新たな社会層が参与していったダイナミズムとが存在した、と結論する。

本論文はこれまで顧みられなかった、賄賂言説と政治文化との構造的連関という論点に注目し、国制・政治史と社会史との接合領域に焦点を合わせて、アテナイ民主政の構造解明に新たな視角と解釈を提供した点で高く評価される。議論の進め方は綿密で、実証は手堅く丹念であり、また先行研究の空白の指摘も的確で、完成度の高い力作であると言える。さらには、賄賂言説の事例を網羅的に収集してカタログ化したことの学問的功績も大きい。

法廷弁論という史料固有のバイアスに対する配慮がやや不十分ではあるものの、最新の研究動向をふまえた上での新知見も数多く提示され、また一次史料の実証的な扱いも信頼が置けるもので、本論文は博士論文としての水準に十分達しているものと認められる。とくに賄賂言説の背景を、政治家の出身階層の変容に求める視点は独創的で、この分野の研究にもたらす貢献は大きい。

よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。